

特集

大きなショッピングモールや繁華街がない、小さなまち・北本。

「何もない」と言われることの多いこのまちに、自宅や職場・学校に次ぐ、「第3の居場所」を見出す人たちがいる。

もともと持っている居場所やコミュニティのほかに、地域に「わたしの居るところ」と思える“場”があること。それは、個人に、そしてこのまちに、一体どんな価値を生むのか。

今回は、そうしたさまざまな“場”で話を聞いた。そこで生まれる、一人一人のストーリー。その積み重ねから見えてきた、このまちの価値とは。

市長公室シティプロモーション・広報担当 (☎594-5505)



行き詰まることがあっても
「あそこに行けば
ほっとする」

「元気をもらえる」

そんな、お守りみたいな場所が
できて心を支えてくれています

我が子の居場所を求めて
&green market

「最初は、子どものために」って。そこしか考えていませんでした」
&green market (アンドグリーンマーケット)で、『コードモ農業大学』として出店する柳井則子さんはそう語る。

生まれ育った上尾から北本へ8年前に居を構え、出産や子育てに奮闘。長男・旺太郎さんと次男・慶太郎さんの居場所を求めて『コードモ農業大学』にたどり着いた。学校に行かない選びをした子どもたちを中心に、農業体験を通じた学びや出会いを得られる場。そこで作った野菜の売り先を見つけた—— 思いついたのが、市役所芝生広場で開催していた&green marketだった。

「もともと自分は何かに出店するタイプの人間じゃないんです」という柳井さん。「コードモ農業大学の活動主旨を伝えて『応援したい』と言ってもらえた時は震えました」
出店は、子どもたちが主体となつて売り方を考えた。絵が得意な子は看板を描いたり、人と話す

そうして知り合った人たちとのつながりを日常でも感じると、ほくほくした気持ちになるのだという。「スーパーの直売コーナーで、『マーケットのあの人の野菜だ!』と見つけて買ってみたいって、だんだんと北本が自分のまちになっていったんです」

安心感のある場所ができて
自分が変わった

&green marketへの出店がきっかけで北本団地のジャズ喫茶『中庭』にもつながった。「中庭」を運営する落合カナコさんに、子どもの居場所づくりの話をする。「私もずっとそういうことがやりたかったんです!」と賛同してくれ、意気投合。我が子やお母さん仲間と一緒に「中庭」へ遊びに行くようになった。



落合カナコさん



のが好きな子は野菜を売り歩いたり、計算が得意な子は会計をしたりと、それぞれが得意な分野で自ら行動していく。そういう子どもたちの姿を見た人から「応援してるよ」「お野菜おいしかったよ」と温かい声をかけてもらった。「豊かな経験と、生きた学びをさせてもらってるなあと思います」
柳井さん自身は、子どもたちを見守りつつもマーケットを楽しんでいる。出店者さんと話したり、たき火のブースに行ってみたり：

「『藍染めしたいな』とか、『ほんこ作りのワークショップやりたいな』とか、思いついたらカナコさんに『中庭使えますか?』って連絡するんです。子どものためというより、お母さんがやりたいことを決めちゃってますね(笑)」

旺太郎くんも、「中庭」や団地の大人たちと話すようになって、やがて一人で「中庭」に出かけるようになった。

「子どもたちもこれから親に話せないことがたくさん出てくるだろうし。そう思ったときに、ほっとできる場所や受け入れてくれる大人がまちの中にある。それってすごく心強いんですよ」

自分たちをわかってくれている人がいるという安心感と、何かあれば「あそこで元気をもらおう」と思える場所ができたこと——それが、『コードモ農業大学』に参加し、&green marketや「中庭」とつながった1年で得られた変化だという。

最後に、旺太郎くんにお母さんの話を聞いてどう思ったか聞いてみると、こう返ってきた。「ママはね、いっぱい変わったよ。昔は誰かに助けられてるママだったけど、今は言葉で人を助けてあげられるのがすごいと思う」